

# 数理アルゴリズムとシミュレーション 演習課題 3

提出期限: 2020/10/29 23:59

以下の課題を行い、レポートを提出すること。レポートの作成に関しては、manaba の「演習課題」ページ内の項目をしっかりと確認すること。また、レポートの作成にあたって参考にした文献や Web ページはその出典を明示すること。

## 課題 1

(1-1) 行列  $A$  を正定値対称行列とし、 $\mathbf{x}^*$  を  $A\mathbf{x} = \mathbf{b}$  の解とする。関数  $f(\mathbf{x})$  を

$$f(\mathbf{x}) = \frac{1}{2} (\mathbf{x}, A\mathbf{x}) - (\mathbf{x}, \mathbf{b})$$

とする。零ベクトルでないベクトル  $\mathbf{h}$  に対して、以下の不等式

$$f(\mathbf{x}^* + \mathbf{h}) > f(\mathbf{x}^*)$$

が成り立つことを示す。空欄に当てはまるものを選び。

$$f(\mathbf{x}^* + \mathbf{h}) - f(\mathbf{x}^*) = \boxed{\phantom{000000}} > 0$$
$$\therefore f(\mathbf{x}^* + \mathbf{h}) > f(\mathbf{x}^*)$$

(a)  $\frac{1}{2}(h, Ah)$       (b)  $\frac{1}{2}(h, Ax^*)$       (c)  $\frac{1}{2}(x^*, Ah)$       (d)  $\frac{1}{2}(x^*, Ax^*)$

(1-2) 次の (1), (2) に当てはまるものをそれぞれ選べ。

ベクトル  $\mathbf{x}_{k+1}$  は  $\mathbf{x}_{k+1} = \mathbf{x}_k + \alpha_k \mathbf{p}_k$  で与えられるとする。このとき、 $\mathbf{r}_k = \mathbf{b} - A\mathbf{x}_k$  とすると、

$$f(\mathbf{x}_{k+1}) = \boxed{\phantom{000000}} \quad (1)$$

となる。係数  $\alpha_k$  は、 $f(\mathbf{x})$  を最小とするように設定するので、

$$\alpha_k = \boxed{\phantom{000000}} \quad (2)$$

が導かれる。

(1)

(a)  $\frac{1}{2}\alpha_k^2(\mathbf{p}_k, A\mathbf{p}_k) - \alpha_k(\mathbf{r}_k, \mathbf{r}_k) + f(\mathbf{x}_k)$   
(b)  $\frac{1}{2}\alpha_k^2(\mathbf{p}_k, A\mathbf{p}_k) - \alpha_k(\mathbf{p}_k, \mathbf{p}_k) + f(\mathbf{x}_k)$

$$(c) \frac{1}{2} \alpha_k^2(\mathbf{p}_k, A\mathbf{p}_k) - \alpha_k(\mathbf{p}_k, \mathbf{r}_k) + f(\mathbf{x}_k)$$

(2)

$$(a) \frac{(\mathbf{p}_k, \mathbf{p}_k)}{(\mathbf{r}_k, A\mathbf{p}_k)} \quad (b) \frac{(\mathbf{p}_k, A\mathbf{p}_k)}{(\mathbf{p}_k, \mathbf{r}_k)} \quad (c) \frac{(\mathbf{p}_k, \mathbf{r}_k)}{(\mathbf{p}_k, A\mathbf{p}_k)} \quad (d) \frac{(\mathbf{p}_k, \mathbf{r}_k)}{(\mathbf{r}_k, A\mathbf{r}_k)}$$

(1-3) 続いて, 式  $\mathbf{p}_{k+1} = \mathbf{r}_{k+1} + \beta_k \mathbf{p}_k$  から  $\beta_k$  を求めたい.  $\mathbf{p}_k$  と  $\mathbf{p}_{k+1}$  は互いに共役であることを利用して,

$$(\mathbf{p}_k, A\mathbf{p}_{k+1}) = \boxed{\quad (1) \quad} \\ = 0$$

となるので,  $\beta_k = \boxed{\quad (2) \quad}$  が導かれる. (1), (2) に当てはまるものをそれぞれ選べ.

(1)

$$(a) (\mathbf{r}_{k+1}, A\mathbf{p}_k) + \beta_k(\mathbf{p}_k, A\mathbf{p}_k) \quad (b) (\mathbf{r}_{k+1}, A\mathbf{p}_k) + \beta_k(\mathbf{r}_k, A\mathbf{r}_k) \\ (c) (\mathbf{r}_{k+1}, A\mathbf{r}_k) + \beta_k(\mathbf{p}_k, A\mathbf{p}_k) \quad (d) (\mathbf{r}_{k+1}, A\mathbf{r}_k) + \beta_k(\mathbf{r}_k, A\mathbf{r}_k)$$

(2)

$$(a) -\frac{(\mathbf{r}_{k+1}, A\mathbf{p}_k)}{(\mathbf{p}_k, A\mathbf{p}_k)} \quad (b) -\frac{(\mathbf{r}_{k+1}, A\mathbf{p}_k)}{(\mathbf{r}_k, A\mathbf{r}_k)} \quad (c) -\frac{(\mathbf{r}_{k+1}, A\mathbf{r}_k)}{(\mathbf{p}_k, A\mathbf{p}_k)} \quad (d) -\frac{(\mathbf{r}_{k+1}, A\mathbf{r}_k)}{(\mathbf{r}_k, A\mathbf{r}_k)}$$

(次ページへ続く)

## 課題 2

ラプラス方程式の差分近似の式から、 $n = 3$  のときの連立一次方程式の係数行列  $A$  および右辺ベクトル  $\mathbf{b}$  を図 1 を参考に作成し、 $A, \mathbf{b}$  の各要素をレポートに示せ。このとき、求めたいベクトル  $\mathbf{x}$  は以下のように表される。

$$\mathbf{x} = (u_{1,1} \ u_{1,2} \ u_{1,3} \ u_{2,1} \ u_{2,2} \ u_{2,3} \ u_{3,1} \ u_{3,2} \ u_{3,3})^T$$

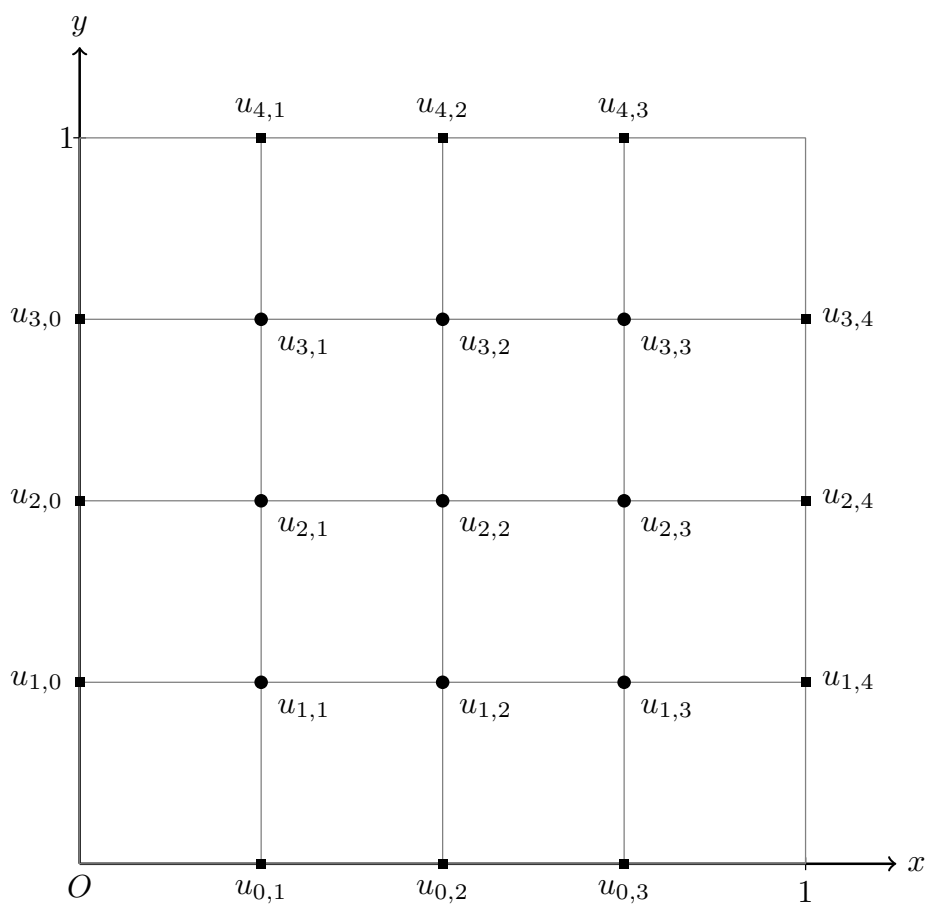


図 1 ラプラス方程式の離散化  $u_{i,j}$  を各格子点における関数  $u$  の値とし、 $u_{i,j} (1 \leq i, j \leq 3)$  は未知数、それ以外は境界条件である

(次ページへ続く)

## 課題 3

前回の課題 (演習課題 2 の課題 1) におけるラプラス方程式の差分近似を, 連立一次方程式に置き換えたときの係数行列  $A$  および右辺ベクトル  $\mathbf{b}$  に対して, 格子数  $n = 4, 50, 200$  としたとき, それぞれ以下の課題を行うこと.  $A, \mathbf{b}$  の行列データのファイルは manaba に用意しているため, それをダウンロードして使用すること.  $n = 4$  の場合, `load n_4` とすると, 変数  $A, \mathbf{b}$  がワークスペースに読み込まれる.  $n = 50, 200$  の場合も同様に `load n_50`, `load n_200` とすることで変数が読み込まれる.

- (3-1) 連立一次方程式  $A\mathbf{x} = \mathbf{b}$  を解く CG 法のプログラムを作成し, 解を求めよ. ここで, 初期ベクトル  $\mathbf{x}_0$  は零ベクトルとし,  $\mathbf{r}_k$  の 2 ノルムが  $10^{-4}$  より小さくなったとき収束したと見なすこと. レポートには各反復ごとの  $\mathbf{r}_k$  の 2 ノルムをグラフに示せ. グラフを作成する際は線形グラフ, 片対数グラフ, 両対数グラフのうちから適切なものを選択すること. なお, CG 法のアルゴリズムは manaba の「CG 法のアルゴリズム」を参照すること.
- (3-2) (3-1) で求めた解  $\mathbf{x}$  を  $n$  次正方行列に変換し, その値を MATLAB の関数 `surf` を用いてグラフに描き, 前回の課題 (演習課題 2 の課題 1) の図 1 と同じ結果になることを確認せよ.

## 課題 4

CG 法を用いてソースコード 1 で生成される行列  $A$  と乱数ベクトル  $\mathbf{b}$  からなる連立一次方程式を解け. このとき, 収束条件は  $\mathbf{r}_k$  の 2 ノルムが  $10^{-8}$  より小さくなった時収束したとみなすこと. また, 行列サイズ  $n$  を  $n = 10, 11, \dots, 100$  の間で変更し, 収束までの反復回数をグラフに描画せよ.

ソースコード 1 行列を生成するプログラム

---

```
1 A = rand(n);  
2 A = (A + A') / 2;  
3 A = A + 5*eye(n);  
4 b = rand(n, 1);
```

---